

【秋田】「クマ被害を減らしたい」有効な防御姿勢を研究-石垣佑樹・秋田大学大学院整形外科学講座医師に聞く◆Vol.1

1日に6人が救急搬送、重症免れた被害者の診療がきっかけ

2025年9月17日（水）配信 m3.com地域版

クマに遭遇した時、ある防御姿勢を取ることで命を守れる可能性が高まる——。こんなユニークな研究の成果が、2025年7月、医学雑誌『臨床整形外科』に掲載された。研究に取り組んだのは、秋田大学大学院整形外科学講座の医師グループ。ツキノワグマの被害が多い県の状況を踏まえ、「被害を少しでも減らしたい」と2024年に始めた。着想のきっかけとなったのは、2023年に北秋田市の市街地で6人が立て続けに襲われた事件にあった。グループのメンバーである石垣佑樹医師に聞いた。（2025年8月25日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら（近日公開）



石垣佑樹氏（本人提供）

浪人中、祖母を看取った主治医の姿に感銘

——石垣先生は2020年に秋田大学医学部を卒業しました。まずは、医師を志した理由をお聞かせください。

私の生まれは大阪府で、小学生まで地元で過ごし、中学と高校時代は北海道の函館ラ・サール中学・高校に通ったのでそちらで寮生活を送りました。その後、2年間の浪人生活を経て秋田大学医学部に入学しました。こうした経緯の中で、医師の仕事を初めて意識したのは小学生の頃です。所属していたバスケットボール部の練習でよくけがをしており、そのたびに近所の整形外科を受診していました。当時は「医者という仕事もあるんだな」と感じたくらいでしたが、浪人生活を始めてすぐ、祖父母を立て続けに亡くしたことで医学部進学を真剣に考えるようになりました。

祖父は病院で、祖母は自宅で亡くなったのですが、祖母を看取ってくださった在宅医の先生が印象深かったんです。テレビで見るとような優しい先生で、まさに地域を支えている「町医者」といった雰囲気があって。私は浪人時に実家に戻っていたので、祖母の苦痛をなるべく和らげようと家族に寄り添ってくださる先生の姿を直で見ることができ、「医師になるべく勉強をもっと頑張ろう」と思いました。

——大学卒業後はどんなキャリアをたどってきたのでしょうか。

初期研修で大曲厚生医療センターに勤務した後、専攻医として秋田労災病院と北秋田市民病院に勤め、2024年に秋田大学大学院整形外科科学講座に移りました。

整形外科の道を選んだのは先ほど話した小学生時代の経験がきっかけですが、大学時代に膝の手術を受けたことも影響しています。私は部活動でバスケをずっと続けており、大学でのプレー中に半月板を損傷したため、秋田大学医学部附属病院整形外科の先生に診ていただきました。先生との交流でより整形外科に関心を持ち、また同大整形外科にバスケ部の先輩が多く、私も入局を勧められました。実際に働いてみると、高齢者の変性疾患から赤ちゃんの病気を診る機会もあり、また、スポーツ外傷の治療にも携われるといったように診療の幅が広く、魅力を感じました。

診療した被害者は頭の皮がはがれ、頭蓋骨が露出

——そんな中、先生は「クマに襲われた際のうつぶせによる防御姿勢は有効か」という、医師としてはユニークな研究に取り組みます。資料によると、ご自身が被害者を治療したことがきっかけだそうですね。

秋田県は全国でもツキノワグマによる人身被害が多く、2023年度には70人が襲われました。私が診療に携わったのは、北秋田市民病院に勤めていた2023年10月19日です。早朝、同市の市街地にクマが現れて立て続けに住民が襲われました。被害に遭った10～80代の男女6人が病院に救急搬送されました。私が7時ごろに病院に行くと、救急外来には既に被害者2、3人が横たわっていました。同院は大学病院などに比べて規模が大きくはないため、こうした緊急時には診療科を問わず対応します。この時も皆で手分けして診療や処置に当たり、私は3、4人を診ました。重症患者は初期治療後に秋田大学医学部附属病院などに搬送され、それ以外の患者は継続して私が所属していた整形外科などで治療しました。

——当時の報道や先生の話によると、現場の凄惨さが想像されます。医師として診てきた交通外傷とはまた違ったインパクトを受けましたか。

私が担当した80代の女性は頭部が血まみれで、頭の皮がはがれて頭蓋骨が見えており、目の周りにもひどい傷を負っていました。骨折もありました。交通外傷とは違い、獣の爪で引っかかれていたため、裂傷が深刻でした。その女性は意識があり、私たちの声かけにも反応していましたが、認知症を抱えていたこともあって意思疎通はできませんでした。私は止血をして患部を包帯で固定し、輸血をしながら救急車に同乗して秋田大学医学部附属病院まで送りました。

防御姿勢のエビデンスない点に着目、有効性を調査へ

——その経験を経て、どのように研究テーマの着想を得たのでしょうか。

私が診た患者さんの中に、重傷を免れた人がいたのです。10代の女性で、その人はクマに襲われた際、首の後ろを両手で組み、体を丸めて自分を守る姿勢を取っていたといいます。診療時にその話を聞いた私は、「クマに遭遇した際には、こういった防御姿勢を取ることが有効なのでは」と想像するようになりました。具体的に研究テーマを設定できたのは、私と同じ講座に在籍している木村竜太（りょうた）助教のアドバイスも大きかったです。

木村先生とは以前から何らかのテーマで共同研究に取り組もうと話をしていました。そこで木村先生に先ほどの経験を話したところ、行政がそのような姿勢を推奨していることを知りました。クマに遭遇してしまった場合、環境省は「クマ類の出没対応マニュアル」で「顔面・頭部が攻撃されることが多いため、両腕で顔面や頭部を覆い、直ちにうつ伏せになるなどして重大な障害や致命的なダメージを最小限にとどめることが重要」とし、[秋田県のホームページ](#)でも「両手で首を抱え、顔を伏せる姿勢」と記載されています。

一方、こうした姿勢の有効性を示すエビデンスは当時なかったそうなので、「それを確かめる研究をすると面白いのでは」と2人で話し合い、テーマが固まりました。



ツキノワグマに襲われた際に有効だとされる防御姿勢（秋田県ホームページから引用）

◆石垣 佑樹（いしがき・ゆうき）氏

2020年秋田大学医学部卒。大曲厚生医療センターで初期研修を受けた後、秋田労災病院と北秋田市民病院に勤め、2024年から秋田大学大学院整形外科科学講座に在籍。専門は膝関節。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

